

編集後記

59巻1号をお届けする。かつて先輩の編集委員の諸先生から異口同音に聞いたことがある、本誌には原稿がなかなか集まらなかった時代があり、その頃は会員諸氏に依頼したり、特集を組んでみたり、編集委員みずから執筆したりして、原稿集めに骨を折ったものだ。実はこのところ、原稿がやや払底気味である。ついこの間までは、著者から掲載まで時間がかかりすぎると批判を受けることが多かったのが嘘のようである。そういう私自身、横書きになってから久しぶりの投稿である。

かたや年次総会は、近年、90題～100題といった演題数で高止まりしており、西卷明彦総会会長から仄聞するところでは、114回総会（5月11日～12日、日本歯科大学）の演題数も総会の回数を上回るものである。したがって、総会での報告を、全報告者とは言わないまでも、そのうちの相当数が近い将来に論文化するよう心がけて下さるなら、問題は即解決、そもそも問題自体が起こっていないであろう。ところが、実際には論文に昇華されないまま終わる報告が多く、また論文化しても本誌以外の媒体に発表する場合も少なくないものと思われる。

他方、近ごろ本誌収載論文が質的に高まっているとの好評価をいただくことがあり、学術雑誌として水準維持に努めることは当然であるが、編集委員として意を強くするものである。しかし、このことが‘敬して遠ざく’という事態を招いている向きがありはしないか、とも懸念する。

重ねて会員諸氏に本誌への論文投稿を呼びかけたい。

(町 泉寿郎)